

ユニット型介護老人保健施設における生活と介護の様態に関する研究

キーワード：ユニット型介護老人保健施設
生活 空間 介護

石井研究室 張間 栄貴
鈴木 辰典

1. 研究の背景と目的

特別養護老人ホームで始められたユニットケアという小規模単位でのケアの形態は、老人保健施設（以下、老健）など他施設にも広がり制度化された。しかし老人保健施設におけるユニット化は十分進んでおらず、全国で3,382施設のうち55施設（2006.5時点）しかユニット化されていないのが現状である。ユニットケアという共通の理念を持ちながらも、特養とはスタッフや入居者属性においても相違があることもあり、老健におけるユニットケアの実態やそのあり方は十分解明されていない。

そのような背景のもと、本研究ではユニット型の老健を対象として、入居者の生活展開、ユニット内外での空間利用、老健ユニットケアにおける介護・看護の実態を明らかにし、ユニット型老健の計画における基礎的な資料を得ることを目的とする。

2. 調査対象と調査日時・方法

調査対象施設は、03年4月に宮城県に開設したユニット型の老人保健施設である。居住棟は、一般棟が6つ、認知症専門棟が4つのユニットから構成されており定員は100名である。調査対象ユニットは、施設側が選定した一般棟の2ユニットであり、一階と二階に配置されている（図1）。各ユニット1名～日中最大で2名のスタッフが各ユニットのケアにあたる。

調査はスタッフと入居者の空間利用と行為・行動について観察・記録を実施した。スタッフの調査は5時から20時までの15時間、1分毎に滞在场所と行為・行動を対象ユニットの全スタッフに対して行った（06.11.9）。入居者の調査は7時から20時までの13時間、10分毎に滞在场所、行為・行動の記録をとった（06.10.23）。

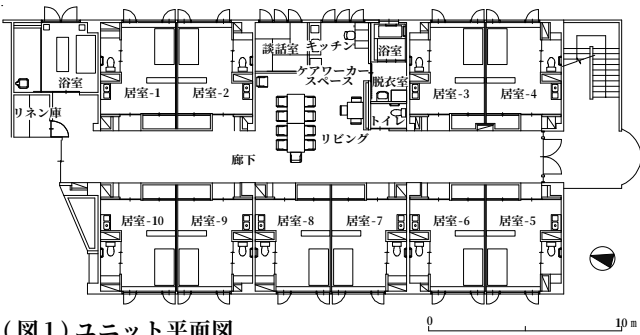
3. 入居者の空間利用と生活行為から見た考察

ユニット1とユニット2の平均介護度はともに2.5である。対象入居者数は、ユニット1が10名、ユニッ

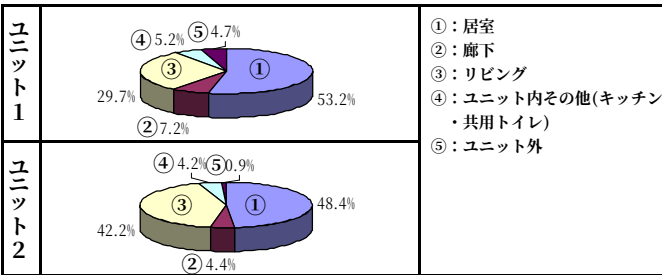
ト2が8名である。

ユニット別の入居者の空間利用を（図2）に示す。両ユニットとも居室での滞在が約50%であり、次いでリビングとなっており、ユニット1が29.7%、ユニット2が42.2%と相違がある。ユニット外の割合は両ユニットとも少なく、ユニット内が95%以上とほぼユニット内で生活が完結している。また、リビング以外の他の共有空間についての割合は、ユニット1が12.4%、ユニット2が8.6%と低く、談話室においてはほとんど使用されていない状況である。さらに個人別での空間利用を見ると介護度の低い入居者は、自由に移動し滞在空間を選択していたのに対し、介護度の高い入居者は、スタッフによる誘導が主のため空間選択はスタッフの誘導に左右され固定的になることが多い。空間利用の形には個人差が大きくみられた。

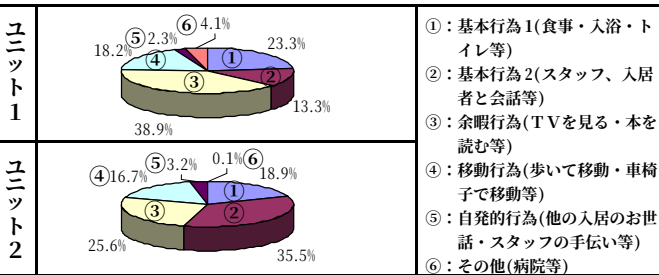
ユニット別にみた入居者の行為・行動の内容別での割合を（図3）に示す。ユニット別で比較すると「基本行為2」（コミュニケーション）と「余暇行為」の割合に大きな差異が見られた。「基本行為2」はユニット1が13.3%、ユニット2が35.5%であった。ユニット1では、リビングでの座席の近い人との会話が目立ち、ユニット2では自立度の高い入居者を中心に会話が繰り返し広げられ、他の入居者、スタッフがその場に混ざるといった場面が比較的多く見られた。「余暇行為」についてはユニット1が38.9%、ユニット2が25.6%と高



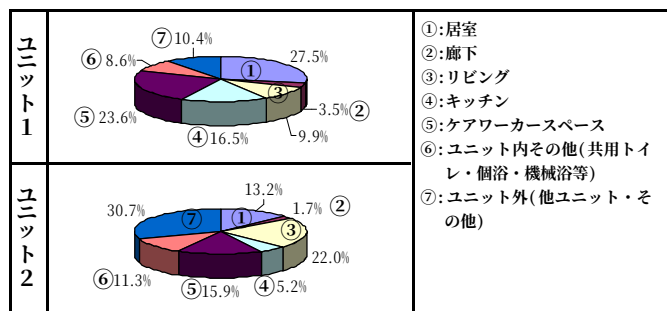
（図1）ユニット平面図



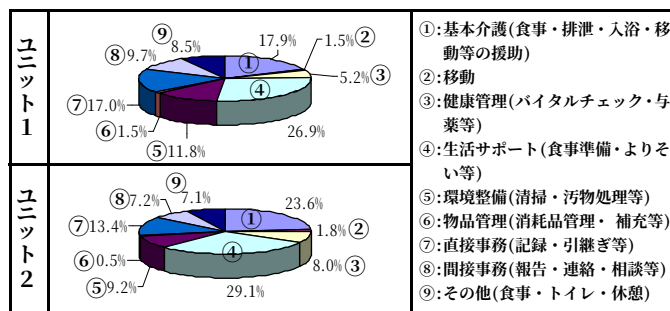
（図2）入居者の空間別の利用割合



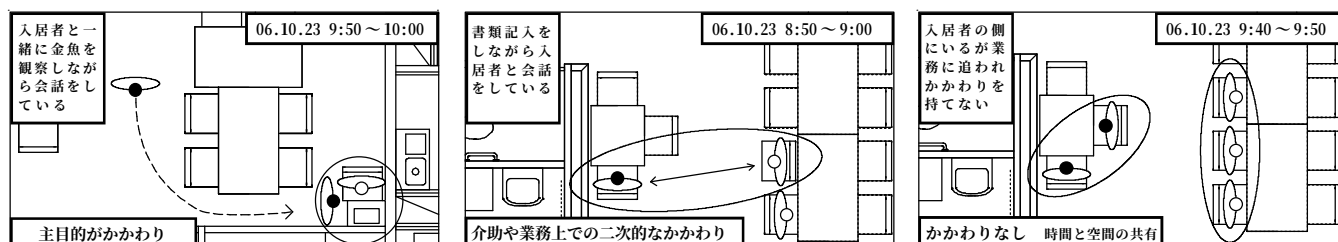
（図3）入居者の行為・行動別の割合



(図4) スタッフの空間別の利用割合



(図5) スタッフの介護行為別の割合



(図6) かかわりの場面事例

(表1) スタッフの滞在頻度(割合)と行為・かかわりの頻度(割合)

頻度(分)	滞在合計	基本介護	生活サポート	その他(記録・環境整備等)	主目的が会話・よりそい①	二次的なかかわり②
総頻度 2699						
廊下	87	27	26	34	4	4
リビング	567	117	238	212	80	73
キッチン	355	2	210	143	2	23
ケアワーカースペース	667	19	56	592	34	20
合計	1676	165	530	981	120	120
割合(%)						
廊下	3.2%	31.0%	29.9%	39.1%	4.6%	4.6%
リビング	21.0%	20.6%	42.0%	37.4%	14.1%	12.9%
キッチン	13.2%	0.6%	59.2%	40.3%	0.6%	6.5%
ケアワーカースペース	24.7%	2.8%	8.4%	88.8%	5.1%	3.0%
合計	62.1%	9.8%	31.6%	58.5%	7.2%	7.2%

く、内訳では両ユニットとも約60～70%を「観察(人・物・動物)する」、「TVを見る」が多くを占めた。生活行為・行動は、入居者個々の性格、身体的属性、スタッフの性格などのユニットの生活を構成する様々な要素によっても違いが見られる。

4. スタッフの空間利用と介護行為から見た考察

スタッフの空間利用を(図4)に示す。ユニット1が89.6%、ユニット2が69.3%と両ユニットとも日中はユニット内で多くを過ごしていた。ユニット2でのユニット外の割合が高いが、これは朝勤スタッフが他のユニットも見ているためである。居室の割合はユニット1が27.5%、ユニット2が13.2%となっており、リビングの割合はユニット1が9.9%、ユニット2が22.0%となっていた。ケアワーカースペース(以下、CWS)の割合はユニット1が23.6%、ユニット2が15.9%と高い。主に記録(筆記)、報告・連絡・相談などの事務行為が行われている。キッチンの割合がユニット1では16.5%と高いが、これは与薬の準備等をしていたためである。

スタッフの介護行為を(図5)に示す。両ユニットとも食事準備や会話・よりそいを含む「生活サポート」と身体的な援助・介助による「基本介護」の割合で約50%を占めている。時間帯別、個人別で比較しても大きな差異は見られない。さらに「生活サポート」の内

訳を見ると「食事準備」に関わる割合が高く、ユニット1が42.3%、ユニット2が29.3%となっている。「基本介護」はユニット1が17.9%、ユニット2が23.6%となっているが、ユニット2には食事介助を必要とする入居者がいたため高くなっている。また、「直接事務」の割合はユニット1が17.0%、ユニット2が13.4%と高く、多くが記録(筆記)によるものである。

5. 共有空間における入居者とスタッフのかかわり

スタッフ、入居者とも滞在頻度の高い共有空間における“かかわり”に着目してその頻度(割合)をみる(表1)。また“かかわり”の場面事例を(図6)に示す。「①主目的が会話・よりそい」、「②二次的なかかわり(何かをしながらのかかわり)」について見ると、ともに7.2%しかなく、滞在頻度の高いリビングでも①が14.1%、②が12.9%であった。スタッフと入居者は同じ空間を利用しているにも関わらず、本来ユニットケアで求められる個別的、直接的なかかわりを十分持つことが難しい状況にあることを示している。

6. 結論と課題

ユニット型K老健における入居者の生活とスタッフによる介護の実態が示された。入居者とスタッフの空間利用の実態からは、ほぼユニット内で生活が完結していることが明らかになった。施設には地域交流の拠点となる共用空間も設けられている。自立度が比較的高い入居者も多いことから、ユニットに閉じない生活をいかにつくっていかれるか課題となろう。また、スタッフと入居者とのかかわりは十分に持てていないことも明らかとなった。他のユニット型特養における調査結果と比較しても、事務行為(特に記録)の割合が高くなっていることも明らかとなっており、介護業務全体のあり方を検討していくなかで、入居者とのかかわりの時間の取り方、そのあり方を検討していく必要もあろう。